

図書館通信 — 61 —

1982. 11

学生諸君の図書館利用の進展のために

三浦弘万

学問が細分化され、それが教室で一方通行的に講義される場合、教師・学生ともに、その状況を批判する精神が必要である。社会に出てからも、「研究」が続くのであり、主体性をもって自分の目で観察調査し、よく考え、成果を獲得する創造的な過程に、人間としての価値が見出される。その際、手順や技術を学習することが不可欠であり、具体的に専門的な考察を伴うことによって、真理がほのかに捉えられてくる。しかも、科学する者は、偏見を避け、自己の営みをお互いの人格の尊重と社会的責任という広い視野の中で、みまえることが大切である。

真の研究活動も、その成果の社会への還元も、人間の知性や教養の涵養かんようなくしては、十分に行えない。そのための重要な部分として、「図書館利用」がある。これが生活態度として習慣化される時、生き甲斐のある生活と喜びが得られるであろう。社会人になってからも、公共図書館に赴く人びとが相当いる。たとえば、静岡県立図書館の今年7月図書利用の登録者数は生徒・学生346人、一般社会人135人、入館者数14,505人である。

静岡大学では、キャンパスの中央に位置する附属図書館は、専門図書、指定図書、学生用図書、寄贈図書など合わせて47万冊の蔵書（昭和56年度末現在）をもち、各種の資料・新聞、さらに学生用定期購入雑誌は140種を数える。閲覧室、視聴覚室、複写室が整備され、専門職の職員が活躍し、学術情報システム化が進みつつある現在、図書館機能は学生諸君の利用を待っている。植樹による自然環境の保全、周辺歩道・階段の補修、マイナス・シーリング下のしわ寄せが倍加しないよう全学的な図書館経費の配慮などによって一層充実されなければならない。

「図書館通信」には、感銘深い私のすすめた

い本〉欄が43回となり、長年月に耐える珠玉の本が、紹介されている。また、〈図書館利用ガイドコーナー〉欄は、図書館学の一端を担うともいえるものであり、有用であるので、合わせて一読をおすすめする。前号同コーナーは、教科書検定関係の文献探索方法という例示がなされ、タイムリーであった。

アジアの人びとは、日本の行った強制や虐殺に、三・一運動や、五・四運動などの独立・民族・反帝運動を対峙させ、憤怒をこめて思い起こす。わたくしたちは、日本帝国主義・軍国主義の行為とはいえ、事実を事実として捉え、深い反省と自己批判をしなければならない。この反省は学問研究の分野に必要であって、これを踏まえなければ、生きるわたくしたちの真に客観的な位置づけはなされず、将来の地平は開かれない。一人一人の平和を誓う憲法の礎いしは、この点にこそある。社会が複雑になると、制度や外交は重要になるが、おおもとの考え方や自己責任が曖昧にされてはならない。わが国のアジアへの侵略が欧米とどの点で共通し、どのような支配をしたかは、図書館で調べることができる。教科用図書検定調査審議会で学問的にどう審議され、結論づけられたかは、国立国会図書館にも資料はない。教科書採択に影響するということではなく、公開性が進められていく中で、それらの資料も集められて、国民の検討を受けるべきであろう。

お互いに主体性の確立に努め、物事を客観的にみる態度を保ち、他人を良い悪いときめつけるのではなく、相互の立場によって立つ基盤や背景を十分に考慮し、その本質を理解して、究極的に民主主義の進展と社会の平和状況の創出に役立てることが、人文・社会科学的な、総じて人間的な営みである。天候不順の夏も過ぎ、秋となった今、

「図書館利用」という生活態度を通して、研究を進め、人間社会をよくみ、真に平和な国際社会を追求する能力と生活者としての豊かな資質を伸ばそうではないか。
(教養部・歴史学)

〈私のすすめたい本 43〉

自由民権百年全国実行委員会編 『自由民権百年の記録』

三省堂 1982年

和田 守

自由民権百年 わが国における民主主義の出発点となった自由民権運動が最高潮に達した1881年から数えて100年目の昨年11月21・22の両日、神奈川県民ホールに沖縄から北海道にいたる全国各地から4,000名にのぼる人々が集い、全国集会所が開催された。メインテーマは「自由民権と現代」、本書はその報告集である。B5版203ページ、ずっしりと読みごたえがある。

遠山茂樹の基調報告、全体報告として色川大吉「現代と自由民権運動」、小池喜孝「民衆史掘りおこしと自由民権」、本多公栄「自由民権と教育」、第一分科会「現代と自由民権」の報告として鈴木安蔵「日本国憲法制定前後」、小田実「自由民権と防衛問題」、米田佐代子「自由民権と婦人問題」、第二分科会「掘りおこしと顕彰運動の交流」における藤林伸治と遠山茂樹の報告「歴史研究と掘りおこし」、第三分科会「現代の自由民権研究」の報告として江村栄一「国会開設と憲法起草の運動」、後藤靖「天皇制と自由民権」、清水吉二と鶴巻孝雄の「自由党と困民党」、山田昭次「世界史のなかの自由民権運動」、記念講演の松本清張「二つの憲法草案をめぐる」と家永三郎「自由民権は生きている」、殉難者遺族の平野恒子、内藤慶一郎、テレビドラマ「獅子の時代」の山田太一、加藤剛、菅原文太らのあいさつ、集会参加者の活発な発言と討論内容などが収録されている。あえて列挙した報告テーマからわかるとおり、多彩な視点から自由と民主主義と平和の原点が浮きぼりされているとともにその現代的課題についての鋭い問題提起がなされている。また自由民権運動研究の学問水準を示しているとともに研究の市民的広がりを物語っている点でも、本書の一読をすすめたい。

自由民権と現代 ところで何故「民権百年」を記念するのか、その理由・意義はどこにあるのか、基調報告で遠山茂樹は次の3点を指摘している。100年前の1881年、第一に国会開設・憲法制度を要求する民権運動の全国的高揚とその政治

的危機に直面した藩閥政府の国会開設の詔勅の渙発をあげ、この民権運動の基盤となった地域結社の役割を強調している。第二に自由党の誕生、翌年の立憲改進黨結成と全国的政党が成立したことを指摘し、国民的団結を保障し国政の変革を主張・要求する政治主体形成の意義を論じている。そして第三に憲法の学習運動、憲法の起草運動が広汎に展開されたことをとりあげ、そこに示されているいきいきとした人権感覚と民主的な国家構想の再認識を呼びかけているのである。

なかんずく地域結社の役割を強調していることは重要である。自由民権期、数千にのぼると推定される地域結社が設立された。そしてこの地域結社は、地域住民の多様な生産・生活の要求をくみあげ、地租軽減、生産技術の改善、地方自治の要求、新知識・技術の学習会など多面的な活動を担い、それを国会開設・憲法制定要求に結合させ、全国的な運動へと押し上げていったのである。

全国集会の成功を支えたのも各地の自由民権研究サークルの地道な地域史研究の積み上げであった。かれらの研究の特色は、それぞれの地域の歴史を対象とし、現地を歩き、克明に史実の「掘りおこし」を試みたことにあった。またその研究会・サークルは、いわゆる研究者・教員だけでなく、多様な職業をもつ数多くの一般市民の参加により、その集団の力で調査・研究をすすめたことは特筆されてよい。この「掘りおこし」をすすめるなかで、地域社会に立脚し、生産と生活の場から自由と人権、民主主義と平和の問題をとりあげてゆく視点を確認し共有していったのである。

こうして民権の理念も個別的具体的な内実を付与され、いきいきとした人権感覚として定着する。そこに民主主義と平和を希求し構想する強靱な生命力も育まれてくるのであろう。また「民権百年」を記念しての「過去と現在の対話」は、学問や研究のあり方にも問題を投げかけている。学問研究の専門分化のもとで、その基盤となり、それを支える生活実感、市民感覚が稀薄になってはいないかということである。自由民権運動の「掘りおこし」は、広汎な一般市民の参加をえて、学問研究の専門性・科学性と市民性の架橋に成功したものといえよう。

なお、本書とあわせて色川大吉『自由民権』*（岩波新書）と静岡県近代史研究会編『静岡県の自由民権運動』*（問合せは教養部田村貞雄研究室）をもおすすめしたい。（人文学部・現代思想史）

*印は本館所蔵

〈私のすすめたい本 43〉

F・ダイソン著 鎮田恭夫訳

『宇宙をかき乱すべきか』

——ダイソン自伝——

ダイヤモンド社 1982年

相原 惇 一

本書はフリーマン・ダイソンの自伝である。ダイソンとは何者だろうか。人は彼を理論物理学者と見るかもしれない。あるいは、天文学者、宇宙論者、未来学者、原子炉設計者、軍縮問題の権威、等々と見るかも知れない。そのいずれもが正しいのである。本書は、人の知性があらゆる束縛を解かれたとき、如何に壮大なイマジネーションの世界を構築することができるかを明らかにする。ダイソンの世界がそれである。

ダイソンは1923年に英国に生れ、ケンブリッジ大学に学ぶ。第二次大戦後、渡米してコーネル大学の物理学者ハンス・ベータに師事する。そこで、彼はファインマンとシュウィンガーの個人的知遇を得、彼等の創始になる量子電気力学の理論大系を完成する。折から、日本の物理学雑誌が届き、同理論のもう一人の創始者を発見する。ダイソンは日本の朝永がその業績にふさわしい榮譽を受けるべく配慮し、自己の論文の表題を「トモナガ、シュウィンガー、ファインマンの放射理論」とする。謙虚な人である。彼は自分が物理学者として特定されるのを避けるがごとく、彼の物理学者としての描写をこれで終える。

ダイソンは原爆の父オッペンハイマーに見出され、プリンストン高等学術研究所に移る。米国に帰化し、同研究所の教授として今日に至る。ダイソンの最初の飛躍は、彼が核エネルギーや宇宙工学に関心を向けたときに始まる。彼は水爆の開発者エドワード・テラーと組んで、安全本位の商業用原子炉 TRIGA の設計を行い、大成功を収める。これまでの所、TRIGA は商業的に採算のとれた唯一の原子炉である。次いで、テッド・テイラーの招きで、オリオン計画すなわち原爆を推進力とする宇宙ロケットの開発計画に参加する。不幸にして、このオリオン計画は米ソ部分核停条約の発効と共に違法となり、中断の憂き目を見る。いずれも数少ない民間主導の大技術開発計画である。ダイソンは、技術開発を成功させるためには、何よりも、民間の創意の尊重と官僚主義の排除が枢要であると指摘する。

ダイソンは一転して、新設の軍備管理軍縮局の

メンバーとなる。ソ連の政策と姿勢の解析を行い、軍縮交渉における幾多の提言をする。彼は、米国が攻撃優位の戦略を放棄し、防御優位の戦略を採用する必要があると主張する。そのために、防御兵器の開発促進が急務であると考え、プリンストン大学の学生が、独力で原爆を設計して話題になったことがある。ダイソンは軍縮管理の専門家として、この学生の指導教官であった。

ダイソンの興味は、未来へ宇宙へと飛翔していく。彼の次代産業革命論は面白い。そこでは、フォン・ノイマンが定義した自己増殖機械オートマトンが主役を演じる。ダイソンは、人手を離れて増殖を続けるオートマトンが産業の担い手となっていく脱工業社会の到来を夢みる。彼はまた、オートマトンによる無人火星改造計画を提唱する。

ダイソンのダイソンたる所以は、何よりも、ダイソン球殻天体の発案であろう。カルダシェフの宇宙文明論によると、任意の知性体の文明がある一定の水準に達すると、1個の恒星が放射する全エネルギーを摂取する形態となる。この段階の知性体は必然的に中空の球殻状天体を建設して、彼等の太陽を取囲むことを計画するだろう、とダイソンは予想する。我々の太陽の周囲にこのダイソン球殻を建設するとしても、原料は木星を破壊するだけで調達が可能とされる。したがって、宇宙における知性体を発見しようと思えば、恒星の全放射エネルギーを吸収したダイソン球殻が放つはずである10ミクロン程度の赤外線を検出すればよいことになる。人類もダイソン球殻の段階を経て、銀河系全体に拡散する時が来るであろう。ダイソンは、その時は人類も生物学的進化を遂げ、多数の種に分化しているであろうと考える。かくして、本書のタイトルにある設問に行き着く。宇宙をかき乱すべきか。

本書は、一人の人間が能力と機会と環境に恵まれれば、驚くほど多彩な創作活動が可能であることを示した、類まれなテキストである。ダイソンは、人間の知性が決して特定の一専門分野に拘束されるべきではなく、いくつもの領域にわたって開花させるものであることを実証する。これと関連して、本書は人生における人との出会いや社会との係わりの重要性も教えてくれる。ダイソンにとって、人との出会いは大なるイマジネーションの主たる源泉であった。本書は、大学に学ぶ全ての学生諸君に対する、価値ある励ましの書となるであろう。本文に引用された多くの詩や散文は、著者の文学的素養の高さをうかがわせる。

(理学部・化学)

〈図書館利用ガイドコーナー 3〉

—文献を探す③—

静大図書館所蔵を調べる（カード目録の使い方について）

閲覧目録は、図書から規則に従って作成されたものである。この目録は図書と利用者を結び付ける媒体である。この媒体を知悉することにより、図書の利用がより促進されることになる。

『図書館利用案内』で基本的な目録の使い方が述べられており、それを読んで貰えば、目録を十分使えると思うが、ここでは『利用案内』から漏れた点（主に和書について）を、落穂拾い的に気付くままに記してみる。

当館の閲覧目録はカード目録であり、それは基本カードを複製して、各単位（書名、著者名、分類）別に分割して排列したものである。カードであるから、一枚一枚繰って見なければならない。面倒と言えば面倒であるが、利点もある。普通冊子体目録では、巻末に索引がついていて、それで頁、図書番号等を引き、本文で該当図書かを確認するが、カード目録では、その場でわかる。

分類では通眺一覧性の方がよいかも知れないが、ざっと見るよりも、一枚ずつ確認することで、思いがけない図書に、当たる可能性もある。面倒ぐさगरらずに、目録を楽しむといった気持ちで引いて貰いたいものである。

書名や著者名は、訓令式ローマ字で読み、ABC順に排列されている。ヘボン式ローマ字が流布してはいるが、当館では、目録を作り始めて以来訓令式によっている。その歴史的な重みもあり、ヘボン式によるわけにはいかない。訓令式ローマ字に馴れて貰いたい。訓令式ローマ字は単純である。ア(a)、エ(e)、イ(i)、オ(o)、ウ(u)の母音の上に、カ(k)、サ(s)、タ(t)、ナ(n)、ハ(h)、マ(m)、ヤ(y)、ラ(r)、ワ(w)、ガ(g)、ザ(z)、バ(b)、パ(p)の各行の子音を組合せたものであり、拗音はその間に(y)を入れればよい(例=ショ=Syô)。ヘボン式のようにチが(ti)からはずれC(chi)に行ったり、ジも(Zi)が(Ji)に行くこともない。日本語のアイウエオ順が、アエイオウ順になり、各行の上のアルファベットによって並んでいることを理解してもらえばよい。しかし、難しいものもある。例えば、ファシズム(Ha si zu mu)、バイオリン(Ba i o rin)、てふてふ=チョウチョウ(Tyô Tyô)といった具合である。(なお、詳しくは、『利用案内』やカー

ドボックスの横に掲示してある訓令式ローマ字表を見て下さい。)

次に**書名目録の検索**上の注意を述べたい。書名は、一見して一つに絞れないときがあり、目録を作成するとき悩むことがある。書名の本体だと思われる部分の上や横に小さい文字で書かれた言葉があったり、少し離れた部分に書名らしきものがあったり、それらを絡げて書くべきか離すべきかで迷う。一応規則にのっとり絡げて書くことの方が多いが、一部には離したり、叢書名扱いをすることもある。覚えている書名で検索できなかった場合は、検索の仕方が異なっていたのではないかと思ひ、もう一度調べなおして欲しいものである。

叢書や全集に収録されている各著作名は、従来からのやり方として目録に出されない場合が多い。特に古典著作物など全集化されることが多いので、書名から検索できないなど不備な点がある。しかし、各著作の著者名は目録として出している。書名に無いからといって所在しないと思わずに、著者名で検索すれば、意外なものが目録に出されていて、思わぬ発見をすることになるであろう。無著者名古典は書名の中に出されている。

外国書の翻訳ものがあるか否かを調べるときや、翻訳されていてでも翻訳書名がわからないときは、その著者名を原綴で、和書の著名者目録(アルファベット順に排列)で探して貰いたい。

図書を検索するとき、書名で引くことが多い。確かに書名の方が読みやすく概ね読むことができるが、著者名は多様な読みがあつて難しい。

著者名が、はっきり判っている場合は、著者名で引くことの方がよい。その著者の作品がどれだけこの図書館にあり、またあつた場合、どういう傾向のものが書かれているかわかるからである。難読姓名は、そのような辞書もあるので先ずそれで調べ、わからない場合には、図書館職員に問合せて貰いたい。

主題検索として、当館では**分類目録**がある。これは、主題が分類記号化されていて、この分類記号に通じていないと検索しにくいと言われる。確かにそういう面もあり、今後引きやすくするため図書館側の努力も必要とされよう。それはさておいて、分類作業の考える規則にのっとりなされた分類と、利用者がイメージとして考える分類との間に齟齬があり、余計に分類検索し難いと思われるのであろう。

ある主題の図書を調べる方法の一つとして、安直なやり方がある。これですべての主題が検索できるわけではなく、ある程度のもものが可能となる

だけである。ある主題の言葉があれば、それを書名目録で引いてみる。必ずしも日本の書名は、初語に主題の言葉がくるとは限らない。いや%としては低いが、主題が初語にあるものはある。該当した場合、その分類記号をみて、二、三ある場合は、それらすべてを分類目録でみてみればよい。するとそれらの主題にふさわしいものが見つかるであろう。そこから言葉を見つけたら、書名目録に戻るといった具合に反復してみるとよい。なんらかの検索が可能となろう。その主題の図書であるとわかって、図書を見出したなら、最新刊図書を直接見て、巻末などにある参考文献、引用文献をみて、その後は書名目録、著者名目録で辿って遡及して、図書を読めばその主題に詳しくなるであろう。一発で自分の思っている図書を見出せるような目録を作りたいと思うが、多数の人の要求に合わせることは困難である。検索には、多少の努力を払ってもらいたい。目録に、なじめばなじむほど必要なものが検索できると思う。

(2) 貸出・閲覧 (学生・分類別)

本館

区分	閲覧		貸出		合計
	出納	開架	出納	合計	
0 総記	138	431	62	493	
1 哲学	484	2,035	534	2,569	
2 歴史	882	2,445	649	3,094	
3 社会	2,145	10,217	1,814	12,031	
4 自然	382	12,734	368	13,102	
5 工学	151	1,875	128	2,003	
6 産業	195	970	214	1,184	
7 芸術	120	1,623	133	1,756	
8 語学	549	1,313	469	1,782	
9 文学	2,592	5,585	1,373	6,958	
雑誌	5,204	—	—	—	
合計	12,842	39,228	5,744	44,972	

分館

(人数)

区分	貸出		貸出		貸出	
	人数	件数	人数	件数	人数	件数
0 総記	197	4 自然	3,178	8 語学	28	
1 哲学	21	5 工学	5,972	9 文学	91	
2 歴史	40	6 産業	10			
3 社会	108	7 芸術	20	合計	9,665	

(3) 文献複写統計

区分	本館			浜松分館				
	人数	件数	枚数	人数	件数	枚数		
依頼	学生	577	634	}	363	878		
	教官	1,566	1,608				27,913	6,022
受託	学生	1,606	2,659	14,808	学内	67	115	1,062
	教官	809	913	7,567	学外	273	424	3,097

昭和 56 年度図書館統計

■利用統計

(1) 貸出・閲覧 (学部別)

区分	利用対象者数	閲覧(冊数)		貸出(冊数)			
		出納	開架(指定を含む)	出納	合計		
学 部	人文	658	5,239	7,751	2,340	10,091	
	教育	1,018	2,294	9,461	1,579	11,040	
	理	344	217	4,557	184	4,741	
	農	287	84	1,081	20	1,101	
	教 養	人文	673	1,124	3,359	481	3,840
		教育	1,037	1,081	4,590	498	5,088
		理	409	312	3,211	136	3,347
		農	317	161	1,239	20	1,259
		工	989	146	2,798	113	2,911
	院 生 等	222	1,079	1,181	373	1,554	
小 計	5,954	11,737	39,228	5,744	44,972		
教 職 員	教官(職員)	429 (330)	—	426	5,931	6,357	
	研究室	—	—	—	6,946	6,946	
	小 計	759	—	426	12,877	13,303	
学 外 者	—	1,105	—	—	—		
合 計	6,713	12,842	39,654	18,621	58,275		

外国への文献複写依頼(本館)

区分	件数	枚(コマ)数
学生	3	22
教官	178	4,510
合計	181	4,532

(4) 相互貸借冊数

区分	本館	浜松分館
貸出	202	0
借用	4	11

■増加図書統計

() 内は昭和 56 年度末の累計

	本館			浜松分館		
	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計
0 総記	980 (29,256)	167 (7,644)	1,147 (36,900)	92 (3,171)	7 (779)	99 (3,950)
1 哲学	1,029 (18,347)	648 (10,913)	1,677 (29,260)	33 (2,875)	45 (480)	78 (3,355)
2 歴史	1,716 (34,283)	522 (6,124)	2,238 (40,407)	14 (1,564)	2 (212)	16 (1,776)
3 社会	6,389 (96,337)	2,633 (26,573)	9,022 (122,910)	78 (3,240)	2 (423)	80 (3,663)
4 自然	2,609 (48,043)	2,763 (38,278)	5,372 (86,321)	874 (19,926)	1,235 (23,262)	2,109 (43,188)
5 工学	1,050 (16,199)	212 (2,438)	1,262 (18,637)	1,338 (27,807)	607 (17,580)	1,945 (45,387)
6 産業	1,202 (28,478)	253 (5,550)	1,455 (34,028)	24 (583)	2 (21)	26 (604)
7 芸術	757 (14,304)	63 (2,291)	820 (16,595)	14 (1,619)	3 (269)	17 (1,888)
8 語学	666 (12,841)	560 (8,184)	1,226 (21,025)	57 (2,867)	45 (2,057)	102 (4,924)
9 文学	2,002 (40,434)	1,022 (26,113)	3,024 (66,547)	9 (3,579)	1 (822)	10 (4,401)
計	18,400 (338,522)	8,843 (134,108)	27,243 (472,630)	2,533 (67,231)	1,949 (45,905)	4,482 (113,136)

■図書館委員会報告

昭和57年度 第3回 S.57.6.14
議事

- 1 昭和57年度図書館運営費予算案について、審議の結果、原案どうり承認し、予算配分委員会に提出することとした。
- 2 図書館関係諸規程の改正について、種々審議したが、なお各案について、各部局に持ち帰り検討することとした。

昭和57年度 第4回 S.57.7.23
議事

- 1 図書館関係諸規程の改正について、要望事項の一部は今後の問題として検討することとしたが、原案の大筋は了承することとし、次回の委員会で確認のうえ、11月頃の評議会で審議願う予定とした。
- 2 その他
 - (1) 7月16日に開催された外国雑誌小委員会において、本年度に予想される外国雑誌購入費の大幅な減額に対する対策、来年度以降の購入計画と前記購入費の配分方法の問題について検討した旨、報告があった。
 - (2) 学術情報システムの動きについて説明があった。
 - (3) 分館設置のダイアログシステムについて説明があった。

お 知 ら せ (本館)

●冬季休業中の長期貸出

貸出冊数=4冊以内
貸出開始日=12月6日(月)
返却期限=昭和58年1月12日(火)

●他大学の図書館への紹介

他大学の図書館の資料を使いたい人には、紹介状を発行しています。卒業論文やレポートの作成などにご利用下さい。希望者は参考調査係の窓口まで。(大学院生は、共通閲覧証を利用して下さい)

●休館(臨時休館を含む)

昭和57年12月23日(火)から、昭和58年1月4日(火)まで。

●開館時間の変更

昭和57年12月21日(火)から、昭和58年1月10日(月)まで。
月～金：午前8時30分～午後5時
土：午前8時30分～12時

■教官著作寄贈図書

丸山健(名誉教授)

「随想集 めぐりあい」丸山健著 静大人文学部法経研究室内丸山健先生退官記念事業会
1982 (049.1/Ma 59)

加藤一夫(学長)

「経済学原理 第二編(下)」(初期イギリス経済学古典選集11)サー・ジェイムズ・ステュアート著 加藤一夫訳 東京大学出版会
1982 (331.314/St 5/2(2))

黒羽清隆(教育学部)

「歴史教育と教科書問題」黒羽清隆著 地歴社
1982 (375.32/ku 72)

「軍隊の語る日本の近代 上・下」(そしえて文庫24, 25)黒羽清隆著 そしえて 1982 (210.6/ku 72/1-2)

田中鉄也(教育学部)

「現代青年の心理」田中鉄也編 建帛社
1981 (371.47/Ta 84)

大矢武師(教育学部)

「新国語教育必携一学習指導要領から国語表記まで一」(国語教育叢書3)大矢武師・鳩貝久武共編 教育出版センター 1980 (375.8/094 開架・閉架)

杉山恵一・近田文弘(教育学部・理学部)

「自然観察の基礎」杉山恵一・近田文弘著 静岡県生活環境部自然保護課編集発行
1982 (407/Sh 94)

土隆一(理学部)

「新第三紀における日本の海洋生物地理一中新世を中心として一」土隆一著〔—〕1981 (456.75/Ts 25)

平野克明(人文学部)

「平野義太郎 人と学問」平野義太郎人と学問編集委員会編 平野克明[ほか]執筆 大月書店
1981 (289.1/H 66_H)

本田猪三郎(工学部)

「遠州路の史蹟探訪1三方原合戦」本田猪三郎著 大平洋出版 1981 (215.4/E 63/1)

大畑専(元事務官)

「大畑専詩集」(日本現代詩人叢書21)大畑専著 芸風書院 1982 (911.56/O 28)

■訂正

第60号に掲載した、本学教官著作の寄贈図書「日本国憲法講義」人権編 上田伝明著が上田伝明著と誤植印刷されました。ここに改めて、上田伝明著と訂正しお詫びいたします。